

アフガニスタンと干ばつ —中村哲医師の実践から読み解くSDGs—

高林 木綿子(国際関係学科・学生)/ペシャライト



はじめに

最近ますます注目されている持続可能な開発目標「SDGs」。授業、電車の広告、テレビCMなど様々なところで目にしますが、SDGsという言葉が一人歩きして実態が分からず、どこか自分とは関係のないものと感じてしまう方も多いのではないのでしょうか。ここでは、アフガニスタンで起きている干ばつと現地で人道支援に取り組んだ医師の中村哲さんの活動を紹介します。中村さんの実践と SDGs の目標を照らし合わせることが「SDGs とは何か、私たちにできることは何か」を考えるきっかけになれば幸いです。

中村哲医師の略歴

- 1946年 誕生
- 1973年 九州大学医学部卒業
- 1984年 パキスタン北西部 ペシャワールに赴任
- 1991年 アフガニスタン国内に 最初の診療所を設立
- 2000年 干ばつが顕在化し井戸を掘る
- 2001年 米国によるアフガン空爆下での食料配給
- 2003年 用水路建設に着手
- 2010年 マルワリード用水路完成
- 2019年 アフガニスタン東部で銃弾を受けて逝去



写真1: 中村哲医師(提供:PMS(平和医療団・日本))

1978年、中村さんはパキスタン・アフガニスタンに登山隊への同行医師として赴きます。そこで病気を抱えた多くの村人たちに出会いますが、十分な治療を施すことができませんでした。帰国後、そのことが心のしこりになって残ります。その後、偶然の縁からパキスタンのペシャワールの病院に赴任します。ペシャワールでは主にらい病(ハンセン病)根絶計画に携わります。医療器具には恵まれませんでした。知恵を出し合って治療に当たりました。様々な困難の中、1986年にはアフガン難民キ

ャンプでの診療をはじめ、1991年にはアフガニスタンに診療所を開設。1998年には現地に拠点病院「PMS(Peace Japan Medical Service)基地病院」の開設にいたります。こうして着実に活動の範囲を広げていきました。中村さんは、「なぜアフガニスタンで活動を？」と問われると、「困っている人がいたら手を差し伸べる—それは普通のことです。」と答えていました。

医師・中村哲、井戸を掘る

2000年にアフガニスタンで干ばつが顕在化します。多くの子どもたちや女性が飢餓で命を落としました。やっとのことでたどり着いた診療所の待ち時間で命が尽きてしまう子どももいました。この未曾有の危機に対して中村さんは「飢えや渇きは薬では治せない」と考えます。そして綺麗な水さえあれば命は救えると「井戸を掘る」という行動に出ます。水があれば感染症の予防になり、農業が復活すれば飢餓を救うこともできます。村の人々との話し合いを重ねながら、延べ1600箇所井戸を掘ることを達成しました(写真2)。



写真2: 中村哲医師自らが井戸の中に入っていき姿は地元住民を勇気付けた(提供:PMS(平和医療団・日本))

医師・中村哲、用水路を拓く

2002年、さらに襲い来る大干ばつや地下水の枯渇を理由に、中村さんは『緑の大地計画』を発表し、「用水路を拓く」という行動に出ます。用水路で水を引き込み、干上がった畑を元に戻して食料を作ることで、より多くの命を救うことができます。中村さんは相手の立場に立って活動することを最も大切にしており、用水路も世界最先端の技術でもってするのではなく、現地の人々の手で建設・修理できるように工夫をしました。出来上がったマルワリード用水路は全長27km。現在、用水路は65万人の農民の生活を支えています(写真3)。



写真3: マルワリード用水路 (提供 PMS(平和医療団・日本))

中村哲医師とSDGs

中村さんの実践をSDGsに照らし合わせて考えてみましょう。
 〈3.すべての人に健康と福祉を〉: 現地で存在するハンセン病以外の腸チフスやマラリア、赤痢など様々な患者の診療も受け入れていました。
 〈6. 安全な水とトイレを世界中に〉: 干ばつに対し、井戸掘りや用水路建設に尽力されました。時には、日本で集めた募金をもとに食料配布も行いました。
 〈12. つくる責任つかう責任〉: 用水路建設時に「誰が使い、誰が修理するのか」ということを意識しました。高度な技術を一方的に押し付けるのではなく、福岡県の山田堰を参考にした斜め堰、蛇籠、柳枝工など日本の伝統的な技術を用いました。これらは比較的安価に施行でき、完成した後も現地の人だけで修復できます。自然環境の面から見ても、過剰な水の摂取回避や生物の生態環境への配慮など、持続可能性が備わっています。



写真4: カマの取水堰改修作業中の中村医師 2011年1月 (提供: PMS(平和医療団・にほん))

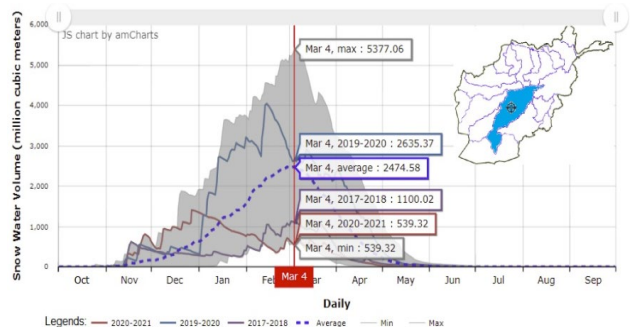
中村哲医師の言葉とSDGs

中村さんの遺した言葉をSDGsに照らし合わせてみます。
 〈4. 質の高い教育をみんなに〉: 「経済的な貧困は必ずしも精神の貧困ではない。識字率や就学率は必ずしも文化的な高さの指数ではない。」
 〈13. 気候変動に具体的な対策を〉: 「アフガニスタンの干ばつは常に地球の50年先をいっている。」 「人間にとって本当に必要なものは、(中略) 何が真実で何が不要なのか、何が人として最低限共有できるものなのか、目を凝らして見つめ、健全な感性と自然との関係を回復することである。」
 〈16. 平和と公正をすべての人に〉: 「現地は外国人の活躍場所ではなく、ともにあゆむ協力現場である」 「真の人類共通の文化遺産は平和と相互扶助の精神である。それは我々の心の中

に築かれるべきものである。」

近年の干ばつ

アフガニスタンは、近年、干ばつに見舞われています。地球規模の温暖化が冬季の降雪を抑制して、雪解け水の減少や下流河川の水位低下が生じ、それがそのまま農業や食糧生産の危機を招いているのです。とくに2018年と2021年には、重要な穀倉地域での河川水位が平年を大きく下回り、農業は危機的状況に陥りました(グラフ)。国連WFPによると、2023年急性食料不安に陥っている人々が2280万人(人口の半数以上)、緊急レベルの食料不安に直面している人々が870万人います。



グラフ: アフガニスタン中部のヘルマンド河の水位 (Mayar 2021)

おわりに

中村さんの実践してきたことをSDGsに照らしあわせてみると、その達成度は明らかです。しかし、中村さんはSDGsを達成するために、医療活動や用水路建設に取り組んだわけではありません。「目今の状況に人としていかに応ずるかが関心事です」という言葉にもあったように、まずは身近な人や素朴な真心を大切に、今ある環境のもとで最善をつくすことを追求したのでしょ。その具体的な行動の積み重ねの結果が、中村さんの生涯なのだと思います。中村先生は「一隅を照らす」という言葉をとても大切になさっていました。私たちがこの言葉の意味を中村先生の行動から考えてみましょう。

主要な参照・参考文献

WFP (2023) [アフガニスタン緊急支援 | World Food Programme] <https://ja.wfp.org/emergencies/afghanistan-emergency>

中村哲 (2013) 『天、共に在り』NHK 出版

中村哲 (2020) 『希望の一滴』西日本新聞社

中村哲 (1993) 『アフガニスタンの診療所から』ちくま文庫

中村哲 (2001) 『医者、井戸を掘る』石風社

ベシヤワール会 『ベシヤワール会報 No.151』(2022)、『ベシヤワール会報 No.126』(2015)

Mayar, Mhd Assem, 2021, *Global warming and Afghanistan: drought, hunger and thirst expected to worsen*, Afghanistan Analysts Network.